

第 1 章

必要最低限の圏論

1.1 諸定義

ものの集まりを**クラス** (class) と呼ぶことにする^{*1}。3つのもの \mathcal{C} は以下の要素からなるとする：

- (1) クラス $\text{Ob}(\mathcal{C})$ 。その元は**対象** (object) と呼ばれる。
- (2) $\forall X, Y \in \text{Ob}(\mathcal{C})$ に対して定まる**集合** $\text{Hom}_{\mathcal{C}}(X, Y)$ 。
- (3) $\forall X, Y, Z \in \text{Ob}(\mathcal{C})$ に対して定まる**写像** $\circ : \text{Hom}_{\mathcal{C}}(X, Y) \times \text{Hom}_{\mathcal{C}}(Y, Z) \rightarrow \text{Hom}_{\mathcal{C}}(X, Z)$ 。

!

- 集合 $\text{Hom}_{\mathcal{C}}(X, Y)$ は記号として $\text{Hom}(X, Y)$ とか $\mathcal{C}(X, Y)$ とも書かれる。
- 元 $f \in \text{Hom}_{\mathcal{C}}(X, Y)$ のことを X から Y への**射** (morphism) と呼び、 $f: X \rightarrow Y$ と書く。
- 写像 \circ のことを**合成** (composite) と呼ぶ。射 $f: X \rightarrow Y$ と $g: Y \rightarrow Z$ の合成は $g \circ f: X \rightarrow Z$ と書かれる。

定義 1.1: 圏

\mathcal{C} が**圏** (category) であるとは、次の 2 条件を充たすことを言う：

- (1) $\forall X \in \text{Ob}(\mathcal{C})$ に対して**恒等射** (identity) と呼ばれる射 $1_X \in \text{Hom}_{\mathcal{C}}(X, X)$ が存在して、
 $\forall W, Y \in \text{Ob}(\mathcal{C})$ および $\forall f \in \text{Hom}_{\mathcal{C}}(W, X), \forall g \in \text{Hom}_{\mathcal{C}}(X, Y)$ について以下が成り立つ：

$$1_X \circ f = f, \quad g \circ 1_X = g$$

- (2) $\forall X, Y, Z, W \in \text{Ob}(\mathcal{C})$ と $\forall f \in \text{Hom}_{\mathcal{C}}(X, Y), \forall g \in \text{Hom}_{\mathcal{C}}(Y, Z), \forall h \in \text{Hom}_{\mathcal{C}}(Z, W)$ に対して**結合則** (associativity) が成り立つ。 i.e.

$$(h \circ g) \circ f = h \circ (g \circ f) \in \text{Hom}_{\mathcal{C}}(X, W)$$

- $\text{Ob}(\mathbf{Sets})$ を全ての集合とし、それらの間の全ての写像を射とし、 \circ を通常の写像の合成とするものの集まり \mathbf{Sets} は圏を成す。

^{*1} 集合全体の集合を考えると Russell のパラドクスに陥る。これを避けるために、集合よりも上位の概念であるクラスを新しく導入する必要がある。なお、考察の対象とする集合の範囲を**宇宙** (universe) という大きな集合に属するものに限る流儀もある。この場合、圏を扱うときに既知の集合論をそのまま適用できるが、集合論の公理に宇宙の存在の公理を追加する必要がある。

- $\text{Ob}(\mathbf{Top})$ を全ての位相空間とし、それらの間の全ての連続写像を射とし、 \circ を通常の写像の合成とするものの集まり \mathbf{Top} は圏を成す.
- 可換環 R について、 $\text{Ob}(R\text{-}\mathbf{Mod})$ を全ての R 加群とし、それらの間の全ての R 準同型を射とし、 \circ を通常の写像の合成とするものの集まり $R\text{-}\mathbf{Mod}$ は圏を成す.

定義 1.2: 小圏・モノイド

- $\text{Ob}(\mathcal{C})$ が集合であるような圏 \mathcal{C} は**小圏** (small category) と呼ばれる.
- $\forall X \in \text{Ob}(\mathcal{C})$ が一点集合であるような圏 \mathcal{C} は**モノイド** (monoid) と呼ばれる.

定義 1.3: 単射, 全射

\mathcal{C} を**圏**, $A, B \in \text{Ob}(\mathcal{C})$, $f \in \text{Hom}_{\mathcal{C}}(A, B)$ とする.

- f が**単射** (monomorphism) であるとは, $\forall X \in \text{Ob}(\mathcal{C})$ に対して写像

$$\begin{aligned} f^*: \text{Hom}_{\mathcal{C}}(X, A) &\longrightarrow \text{Hom}_{\mathcal{C}}(X, B), \\ g &\longmapsto f \circ g \end{aligned}$$

が集合の写像として単射であること.

- f が**全射** (epimorphism) であるとは, $\forall X \in \text{Ob}(\mathcal{C})$ に対して写像

$$\begin{aligned} {}^*f: \text{Hom}_{\mathcal{C}}(B, X) &\longrightarrow \text{Hom}_{\mathcal{C}}(A, X), \\ g &\longmapsto g \circ f \end{aligned}$$

が集合の写像として単射であること.

定義 1.4: 同型射

圏 \mathcal{C} と射 $f \in \text{Hom}_{\mathcal{C}}(X, Y)$ をとる.

- f が**同型射** (isomorphism) であるとは,

$$\exists g \in \text{Hom}_{\mathcal{C}}(Y, X), \quad g \circ f = 1_X \quad \text{かつ} \quad f \circ g = 1_Y$$

が成り立つことを言う. このときの射 $g \in \text{Hom}_{\mathcal{C}}(Y, X)$ のことを f の**逆** (inverse) と呼ぶ.

- 同型射 $f \in \text{Hom}_{\mathcal{C}}(X, Y)$ が存在するとき, X と Y は**同型** (isomorphic) であると言う.
- 対象 $X \in \text{Ob}(\mathcal{C})$ について, $\text{Hom}_{\mathcal{C}}(X, X)$ の元のうち同型射であるもの全体の集合は合成によって群を成す. この部分集合を $\text{Aut}_{\mathcal{C}}(X) \subset \text{Hom}_{\mathcal{C}}(X, X)$ と書き, X の \mathcal{C} における**自己同型群** (automorphism group) と呼ぶ.

定義 1.5: 部分対象

\mathcal{C} を圏とする.

- $A \in \text{Ob}(\mathcal{C})$ の **部分対象** (subobject) とは, $B \in \text{Ob}(\mathcal{C})$ と **単射** $f \in \text{Hom}_{\mathcal{C}}(B, A)$ の組 (B, f) のことを言う.
- $A \in \text{Ob}(\mathcal{C})$ の部分対象 $(B, f), (C, g)$ が**同値** (equivalent) であるとは, ある **同型射** $\varphi \in \text{Hom}_{\mathcal{C}}(B, C)$ であって $g \circ \varphi = f$ を満たすものが存在することを言う^a.

^a $B \simeq C$ や $f \simeq g$ と略記することがある.

定義 1.6: 商対象

\mathcal{C} を圏とする.

- $A \in \text{Ob}(\mathcal{C})$ の **商対象** (quotient object) とは, $B \in \text{Ob}(\mathcal{C})$ と **全射** $f \in \text{Hom}_{\mathcal{C}}(A, B)$ の組 (B, f) のことを言う.
- $A \in \text{Ob}(\mathcal{C})$ の部分対象 $(B, f), (C, g)$ が**同値** (equivalent) であるとは, ある **同型射** $\varphi \in \text{Hom}_{\mathcal{C}}(B, C)$ であって $\varphi \circ f = g$ を満たすものが存在することを言う^a.

^a $B \simeq C$ や $f \simeq g$ と略記することがある.

定義 1.7: 充満部分圏

2つの圏 \mathcal{C}, \mathcal{D} をとる. 圏 \mathcal{D} が \mathcal{C} の**充満部分圏** (full subcategory) であるとは, 次の2条件が満たされることを言う:

- (1) クラス $\text{Ob}(\mathcal{D}) \subset \text{Ob}(\mathcal{C})$,
- (2) $\forall X, Y \in \text{Ob}(\mathcal{D}), \quad \text{Hom}_{\mathcal{D}}(X, Y) = \text{Hom}_{\mathcal{C}}(X, Y).$

定義 1.8: 反対圏

圏 \mathcal{C} に対して, その**反対圏** (opposite category) \mathcal{C}^{op} を次のように定義する:

$$\begin{aligned} \text{Ob}(\mathcal{C}^{\text{op}}) &:= \text{Ob}(\mathcal{C}), \\ \text{Hom}_{\mathcal{C}^{\text{op}}}(X, Y) &:= \text{Hom}_{\mathcal{C}}(Y, X) \quad \forall X, Y \in \text{Ob}(\mathcal{C}^{\text{op}}) \end{aligned}$$

1.2 関手と自然変換

圏を対象と考えたとき, 射にあたるのは**関手** (functor) である.

\mathcal{C}, \mathcal{D} を圏とする. \mathcal{C} と \mathcal{D} の間の対応

$$F: \mathcal{C} \longrightarrow \mathcal{D}$$

は次の2種類の対応付けから成るとする:

- (1) $\forall X \in \text{Ob}(\mathcal{C})$ に対して, 記号 $F(X)$ で書かれる $\text{Ob}(\mathcal{D})$ の元を一意に対応づける^{*2}.
 (2) $\forall X, Y \in \text{Ob}(\mathcal{C})$ に対して, 射を移す写像

$$F: \text{Hom}_{\mathcal{C}}(X, Y) \longrightarrow \text{Hom}_{\mathcal{D}}(F(X), F(Y)), f \longmapsto F(f)$$

を対応付ける.

定義 1.9: 共変関手

$F: \mathcal{C} \longrightarrow \mathcal{D}$ が**共変関手** (covariant functor) であるとは, 以下の2条件を満たすことを言う:

(恒等射を保つ) $\forall X \in \text{Ob}(\mathcal{C})$ に対して

$$F(1_X) = 1_{F(X)} \in \text{Hom}_{\mathcal{D}}(F(X), F(X))$$

が成り立つ.

(合成を保つ) $\forall f \in \text{Hom}_{\mathcal{C}}(X, Y), \forall g \in \text{Hom}_{\mathcal{D}}(Y, Z)$ に対して

$$F(g \circ f) = F(g) \circ F(f) \in \text{Hom}_{\mathcal{D}}(F(X), F(Z))$$

が成り立つ.

射の向きを逆にすると**反変関手**の定義になる. いま \mathcal{C}, \mathcal{D} を圏とし, \mathcal{C} と \mathcal{D} の間の対応

$$F: \mathcal{C} \longrightarrow \mathcal{D}$$

は次の2種類の対応付けから成るとする:

- (1) $\forall X \in \text{Ob}(\mathcal{C})$ に対して, 記号 $F(X)$ で書かれる $\text{Ob}(\mathcal{D})$ の元を一意に対応づける.
 (2) $\forall X, Y \in \text{Ob}(\mathcal{C})$ に対して, 射を移す写像

$$F: \text{Hom}_{\mathcal{C}}(X, Y) \longrightarrow \text{Hom}_{\mathcal{D}}(F(Y), F(X)), f \longmapsto F(f)$$

定義 1.10: 反変関手

$F: \mathcal{C} \rightarrow \mathcal{D}$ が**反変関手** (contravariant functor) であるとは, 以下の2条件を満たすことを言う:

(恒等射を保つ) $\forall X \in \text{Ob}(\mathcal{C})$ に対して

$$F(1_X) = 1_{F(X)} \in \text{Hom}_{\mathcal{D}}(F(X), F(X))$$

が成り立つ.

(合成を保つ) $\forall f \in \text{Hom}_{\mathcal{C}}(X, Y), \forall g \in \text{Hom}_{\mathcal{D}}(Y, Z)$ に対して

$$F(g \circ f) = F(f) \circ F(g) \in \text{Hom}_{\mathcal{D}}(F(Z), F(X))$$

が成り立つ.

関手を対象と考えたときに, 射にあたるものが次に定義する**自然変換**である:

^{*2} いわば, 「写像」 $F: \text{Ob}(\mathcal{C}) \rightarrow \text{Ob}(\mathcal{D})$ とでも言うべきもの.

定義 1.11: 自然変換

2つの共変関手 $F, G: \mathcal{C} \rightarrow \mathcal{D}$ について、以下のような対応 $\varphi: F \rightarrow G$ のことを**自然変換** (natural transformation) と呼ぶ:

- (1) $\forall X \in \text{Ob}(\mathcal{C})$ に対して、射

$$\varphi_X \in \text{Hom}_{\mathcal{D}}(F(X), G(X))$$

を対応付ける。

- (2) $\forall f \in \text{Hom}_{\mathcal{C}}(X, Y)$ について図式 1.1 が可換になる。

$$\begin{array}{ccc} F(X) & \xrightarrow{F(f)} & F(Y) \\ \downarrow \varphi_X & & \downarrow \varphi_Y \\ G(X) & \xrightarrow{G(f)} & G(Y) \end{array}$$

図 1.1: 自然変換

共変関手 F から G への自然変換全体が成すクラスを $\mathbf{Nat}(F, G)$ と書くことにする。

定義 1.12: 自然同値

2つの共変関手 $F, G: \mathcal{C} \rightarrow \mathcal{D}$ の間の自然変換 $\varphi: F \rightarrow G$ を与える。

- φ が**自然同値** (natural equivalence) であるとは、 $\forall X \in \text{Ob}(\mathcal{C})$ に対して $\varphi_X \in \text{Hom}_{\mathcal{D}}(F(X), G(X))$ が**同型射**であることを言う。
- 共変関手 F, G が**自然同値** (naturally equivalent) であるとは、 F から G への自然同値が存在することを言う。
- 共変関手 F に対し、 $\text{id}_F(X): F(X) \rightarrow F(X)$ により定まる F から F 自身への自然変換 φ を**恒等自然変換** (identity natural transformation) と呼ぶ。

定義 1.13:

共変関手 $F: \mathcal{C} \longrightarrow \mathcal{D}$ を与える.

- F が**忠実** (faithful) であるとは, $\forall X, Y \in \text{Ob}(\mathcal{C})$ に対して写像

$$F: \text{Hom}_{\mathcal{C}}(X, Y) \longrightarrow \text{Hom}_{\mathcal{D}}(F(X), F(Y)), f \longmapsto F(f)$$

が単射であること.

- F が**充満** (full) であるとは, $\forall X, Y \in \text{Ob}(\mathcal{C})$ に対して写像

$$F: \text{Hom}_{\mathcal{C}}(X, Y) \longrightarrow \text{Hom}_{\mathcal{D}}(F(X), F(Y)), f \longmapsto F(f)$$

が全射であること.

- F が**本質的全射** (essentially surjective) であるとは, $\forall Z \in \text{Ob}(\mathcal{D})$ に対して $X \in \text{Ob}(\mathcal{C})$ が存在して $F(X)$ が Z と同型になること.

忠実充満関手のことを**埋め込み**と呼ぶことがある.